

# 日本文化の背景となる仏教文化の研究

## A Study of Buddhist Culture as the Background of Japanese Culture

研究代表者	相楽 勉	(東洋学研究所長、文学部哲学科)
研究分担者	伊吹 敦	(文学部東洋思想文化学科)
	渡辺 章悟	(文学部東洋思想文化学科)
	谷地 快一	(文学部日本文学文化学科)
	菊地 章太	(ライフデザイン学部健康スポーツ学科)
	水谷 香奈	(文学部東洋思想文化学科)
	高橋 典史	(社会学部社会文化システム学科)
	佐藤 厚	(東洋学研究所客員研究員)
	大鹿 勝之	(東洋学研究所客員研究員)
	コプラ・ヴィクター・バブー	(東洋学研究所客員研究員)

研究期間 平成 30 年 4 月 10 日～平成 31 年 2 月 15 日

キーワード／①日本文化 Japanese Culture ②仏教 Buddhism ③日本文学 Japanese Culture  
④日本哲学 Japanese Philosophy ⑤仏教教育 Buddhist Education

平成 30 年度交付額／3,600,000 円

研究発表／学会および口頭発表

・相楽勉

「〈哲学〉受容の背景をなす仏教文化」(東洋学研究所井上円了記念研究助成・大型研究特別支援助成による研究「日本文化の背景となる仏教文化の研究」公開講座、2018 年 12 月 22 日、東洋大学白山キャンパス)

・伊吹敦

「井上円了の仏教理解とその影響—近代中国仏教との関連を中心に」(日本印度学仏教学会・第 69 回学術大会、パネル C「近代仏教における井上円了の位置づけをめぐって」、2018 年 9 月 2 日、東洋大学白山キャンパス)

・渡辺章悟

「寺田福寿と井上円了」(東洋大学井上円了センター研究会、2018 年 7 月 28 日、東洋大学白山キャンパス)

「大乘仏教の説法者ダルマバーナカ」(愛知学院大学禅学研究所講演会、愛知学院大学・東海仏教学会共催、2018 年 6 月 21 日、愛知学院大学日進キャンパス)

「大乘仏教の伝承者たち—bodhisattva, satpuruṣa, dharmabhāṇaka—」日本印度学仏教学会・第 69 回学術大会、2018 年 9 月 1 日、東洋大学白山キャンパス)

「日本の山岳信仰の独自性—立山信仰をめぐって」(東洋学研究所井上円了記念研究助成・大型研究特別支援助成による研究「日本文化の背景となる仏教文化の研究」公開シンポジウム、2019 年 1 月 12 日、東洋大学白山キャンパス)

・谷地快一

「日本の詩歌と釈教—芭蕉連句を軸にして—」(東洋学研究所井上円了記念研究助成・大型研究特別支援助成による研究「日本文化の背景となる仏教文化の研究」公開シンポジウム、2019 年 1 月 12 日、東洋大学白山キャンパス)

・菊地章太

「媽祖崇拜の北限をたどる—東アジア海域世界における信仰圏の拡大」、(東洋学研究所井上円了記念研究助成・大型研究特別支援助成による研究「日本文化の背景となる仏教文化の研究」公開講座、2018年7月7日、東洋大学白山キャンパス)

・水谷香奈

「平塚らいてうと仏教」(日本印度学仏教学会・第69回学術大会、2018年9月2日、東洋大学白山キャンパス)

「平塚らいてうの思想—仏教との関わりを中心に—」(東洋学研究所井上円了記念研究助成・大型研究特別支援助成による研究「日本文化の背景となる仏教文化の研究」公開講座、2018年11月10日、東洋大学白山キャンパス)

・高橋典史

"Immigration and Religious Pluralisation in Contemporary Japan" (The University of Manchester, East Asian Studies, Research Seminar Series, 2018/11/7)

"Migrants and Religious Diversification in Contemporary Japan" (Lecture, Centre for the Study of Japanese Religions, SOAS University of London (School of Oriental and African Studies), 2019/1/17)

・佐藤厚

「島地黙雷、生田得能『三国仏教略史』と東アジア近代仏教への影響」(近代日本仏教史研究会、2018年5月26日、仏教大学紫野キャンパス)

「井上円了の仏教・哲学—一致論と近代日本宗教思想における意義」(日本印度学仏教学会・第69回学術大会、パネルC「近代仏教における井上円了の位置づけをめぐる」、2018年9月2日、東洋大学白山キャンパス)

「島地黙雷、生田得能共著『三国仏教略史』の中国語、韓国語への翻訳—近代日本仏教が東アジア仏教に与えた影響の一例」(東洋学研究所井上円了記念研究助成・大型研究特別支援助成による研究「日本文化の背景となる仏教文化の研究」公開シンポジウム、2019年1月12日、東洋大学白山キャンパス)

研究発表／出版物

・相楽勉

「明治期の哲学受容再考—〈宗教と科学〉問題を軸に一」(『国際哲学研究』第8号、2019年3月)

・伊吹敦

「浄覚 注般若波羅蜜多心経」(渡辺章悟・高橋尚夫編『般若心経註釈集成〈中国・日本編〉』起心書房、2018年7月)

「胡適の禅研究の史的意義とその限界」(『駒澤大學佛教學部論集』第49号、2018年10月)

「近代における傳統佛教評價の問題—日本・中国における大乘非佛説論・『起信論』中國撰述説への對應を中心に」(『東洋思想文化』第6号、2019年3月)

・渡辺章悟

「総論 中国・日本における『般若心経』の註釈と展開」(『般若心経註釈集成〈中国・日本編〉』、起心書房、2018年7月)

「大乘仏教の伝承者たち—satpuruṣaをめぐって—」(『印度学仏教学研究』第67巻第1号、2018年12月)

「Satpuruṣa考」(『東洋思想文化』第6号、2019年3月)

・谷地快一

「求道の終着地—長明・兼好から芭蕉へ—」(『文学論藻』第93号、2019年3月)

・菊地章太

「北限の地から媽祖崇拜を考える — 民間信仰と道教の連続性」(『名古屋大学中国哲学論集』第17号、2018年5月)

『位牌の成立 — 儒教儀礼から仏教民俗へ』(東洋大学出版会、2018年6月)

「世変経成立年代考」(『東洋学研究』第56号、2019年3月)

・水谷香奈

「平塚らいてうと仏教—浄土問題への対応とその思想的背景—」(『印度学仏教学研究』第67巻第2号、2019年3月)

・高橋典史

高橋典史・白波瀬達也・星野壮編著『現代日本の宗教と多文化共生——移民と地域社会の関係性を探る』(明石書店、2018年4月)

高橋典史・高山秀嗣・武井順介「日本の伝統仏教の海外展開の現状と課題」(宗教情報リサーチセンター編・井上順孝責任編集『海外における日本宗教の展開—21世紀の状況を中心に—』、公益財団法人国際宗教研究所宗教情報リサーチセンター、2019年3月)

・佐藤厚

「儀礼文献としての『一乘法界図』」(『専修人文論集』第104号、2018年11月)

・大鹿勝之

「紀平正美『行の哲学』における大行—個性と価値、歴史、国家—」(『東洋学研究』第56号、2019年3月)

## 研究経過および成果の概要

### 1. 研究方法

本研究は、日本仏教文化の特質について、諸外国の仏教との差異を踏まえて、日本仏教の特色を明らかにし、芸能や文学作品にみられる日本的な心性、日本の哲学の独自性について、その背景となる仏教文化の影響を、文学研究者、哲学研究者と仏教研究者とのコラボレーションによって探求する。また、海外における日本仏教文化の評価を、海外への仏教の布教活動の研究、国際シンポジウムでの海外研究者の見解により考察する。そして、以上の成果について、講座の開催を通じて、研究成果が広く一般に受容される教育のあり方を検討する。

研究体制として、平成30年度、本研究は以下の3つのユニットの構成のもと、研究が進められた。

第1ユニット 日本における仏教文化の特質についての研究

構成員：

伊吹 敦 研究員 (分担テーマ：日本において禅が果たした役割)

渡辺章悟 研究員 (分担テーマ：大乘仏教と日本仏教)

水谷香奈 研究員 (分担テーマ：浄土思想と日本仏教)

第2ユニット 日本の文学・芸能への仏教の影響、中国思想と仏教との関係、日本哲学と仏教との関係についての研究

構成員：谷地快一 研究員 (分担テーマ：俳諧を中心とした日本文学と仏教)

菊地章太 研究員 (分担テーマ：中国思想と日本仏教)

相楽 勉 研究所長 (分担テーマ：日本における明治期以降の哲学)

大鹿勝之 客員研究員 (分担テーマ：昭和初期以後の哲学と仏教)

第3ユニット 日本仏教の海外への影響についての研究、仏教教育の比較研究

構成員：高橋典史 研究員 (分担テーマ：日本仏教の海外布教)

佐藤 厚 客員研究員 (分担テーマ：近代東アジアにおける日本仏教)

コプラ・ヴィクター・バブー 客員研究員 (分担テーマ：仏教教育の比較研究)

以上の三つのユニットに接続領域を設け、それぞれのユニット間の関係と総合について検討がなされる。三つのユニットの接続領域においては、研究成果を踏まえた講座のプログラムを検討する。研究代

表者は、各ユニットの研究者との討議の上、統括し、研究の運営に当たる。

## 2. 研究経過および成果の概要

本研究は井上円了記念研究助成・大型研究特別支援助成を受け、東洋学研究所の研究所長を研究代表者として平成 29 年度より 2 年計画で行われたが、平成 30 年 4 月 1 日より相楽勉研究員が所長の任務に就いたため、平成 30 年度の研究代表者は相楽勉研究所長となった。

また、本研究所の園田沙弥佳奨励研究員が研究支援者として、講座・シンポジウムの開催準備など、本研究の業務を担当した。

平成 30 年度の各研究者の研究活動は以下のとおりである。

谷地快一研究員

和歌連歌俳諧における釈教の世界を中心にして、仏教的思考の影響を追跡した。

伊吹敦研究員

中国の禅思想が日本に及ぼした影響について検討した。また、第 7 回韓・中・日国際仏教学術大会に参加した。

渡辺章悟研究員

修験道に見る仏教の展開を研究テーマとして、立山の山岳信仰の歴史と実際の信仰の調査のため平成 30 年 8 月 8 日～8 月 10 日、立山山頂、立山室堂、立山博物館、岩峯寺、雄山神社の調査を行った。

菊地章太研究員

中国道教の海域神信仰と日本仏教との融合の過程について、中国における媽祖崇拝の展開、および日本におけるその足跡を辿った。

水谷香奈研究員

平塚らいてうが仏教と関わってゆく経緯と、彼女の仏教理解について確認した。

高橋典史研究員

ハワイを中心とした近代における日本仏教の海外布教の研究を進め、また、欧州のドイツにおける日本宗教の関連組織による諸活動について調査した。

大鹿勝之客員研究員

紀平正美（1874-1949）の『行の哲学』の研究を進め、紀平の議論における仏教の背景を把握し、個性と価値、歴史、国家における紀平の議論を検討した。その成果については、本研究所紀要に論文を投稿した。

佐藤厚客員研究員

日本仏教が東アジアとの交渉の中で、韓国や中国など東アジア諸国にどのような影響を与えたのかについて、『三国仏教略史』の韓国語・中国語への翻訳を一例として研究した。また、鎌倉時代（13 世紀）の凝然が著わし、当時日本に存在した 8 つの主たる宗派と新興の禅宗と浄土宗の合計 10 の宗派について整理した文献『八宗綱要』の韓国における流通・影響、および『三国仏教略史』韓国語翻訳版に関して、平成 30 年 9 月 4 日～9 月 8 日に韓国の東国大学校図書館、国立中央図書館で調査を行った。

コプラ・ヴィクター・バブー客員研究員

昨年度は平成 29 年 10 月 5 日より 10 月 15 日まで来日し、研究発表、公開講義を行い、本研究所の研究員・客員研究員・奨励研究員と研究交流を行ったが、平成 30 年度は昨年度に引き続き来日して研究交流を予定していたものの、受け入れ体制が整わず、来日を見合わせるようになった。

研究成果については、研究成果が広く一般に受容される教育のあり方を検討するため、平成 30 年 7 月 7 日、11 月 10 日、12 月 22 日に公開講座を開催し、菊地研究員、水谷研究員、相楽研究所長が研究成果を講座において発表した。公開講座については、平成 30 年 10 月 6 日に本研究所の原田香織研究員に講座を依頼し、東洋大学白山キャンパスで「小倉百人一首における仏教思想」という題目での公開講座が開催された。また、平成 31 年 1 月 12 日に、研究総括としてシンポジウムを開催し、相楽研究所が司会を務め、渡辺研究員、谷地研究員、佐藤客員研究員が研究発表を行った。

海外の研究者との研究交流については、伊吹敦研究員を研究代表者とする東洋学研究所の研究所プロ

プロジェクト「東アジアにおける仏教思想の成立と展開、並びにその意義の解明」と連携して研究交流が進められ、また伊吹研究員を研究代表者とする科学研究費助成事業・科学研究費補助金研究(基盤研究(A))による共同研究「海外の研究者との連携による中国・日本における禅思想の形成と受容に関する研究」(JSPS 科研費 JP17H00904)と本研究との共催で、平成30年7月21日・7月22日に国内外の研究者を講演者・発表者に招き、「世界の道元研究の現在」というテーマで第1回道元国際シンポジウムを開催した。

そして、本研究の研究成果をまとめたA4・総120ページの研究報告書を平成31年2月15日に刊行した。

### 3. 今後の研究における課題または問題点

本研究において、各研究者の研究が進展し、講座・シンポジウムの開催によって成果を示すことができたが、日本における仏教文化の特質、および仏教文化と日本文化との関係については、総合的な把握がなしえたとは言いがたい。しかしながら、今後の研究への端緒となるような成果がなされたとみている。今後も、本研究の課題に関連した研究を進め、この課題に応えていきたい。

## Summary

### A Study of Buddhist Culture as the Background of Japanese Culture

Buddhism has a great influence on Japanese culture as seen in Japanese literature and custom and so on. However, as for Japanese literature, in order to grasp the influence of Buddhism precisely, it needs to be acquainted to Buddhism. In this case, the collaboration between Buddhist scholar and researcher of Japanese literature complement the lack of knowledge of both of them.

In addition, there is a problem how to deliver the result of specialized Buddhist research to the public. The advanced research of Buddhism is unapproachable for the outsider. On the other hand, it is hard to say that the fruitful research results penetrate widely into the public. Therefore, it needs to examine the method of general education with regard to Buddhist research.

This research aims at clarifying the characteristics of Japanese Buddhism by the comparative study with foreign Buddhism, and inquiring the influence of Buddhism on Japanese mentality in Japanese literature and traditional performing acts, and on Japanese philosophy after Meiji era. In this way, this research tries to grasp the essence of Japanese Buddhist culture. Moreover, as to the estimation of Japanese Buddhism in overseas, the researchers in this research consider the influence of Japanese Buddhism on overseas and the opinions of foreign Buddhist researchers in the international symposium. Concerning the diffusion of Buddhist knowledge, the researchers examine the methods of educations in the open lectures.

The researchers of this research and their role are as follows.

SAGARA Tsutomu, research presentative, director of the Institute of Oriental Studies, Toyo University in 2018, integrates the members' researches and researches the background of Buddhism in Japanese philosophy after Meiji era.

IBUKI Atsushi: the influence of Zen Buddhism on Japanese Buddhism

WATANABE Shogo: the worship of Buddhist canon and Japanese Buddhism

TANICHI Yoshikazu: the relationship of Buddhism to Haiku

KIKUCHI Noritaka: Chinese thought and Japanese Buddhism

MIZUTANI Kana: the thought of pure land Buddhism and Japanese Buddhism

TAKAHASHI Norihito: the overseas missionary of Buddhism

SATO Atsushi: Japanese Buddhism in the modern East Asia



OSHIKA Katsuyuki: Buddhism and Japanese philosophy of early Showa era

Koppula Victor Babu: Comparative study of Buddhist education

The research members research in the following three units.

Unit 1: the researchers study the characteristics of Japanese Buddhism comparing with foreign Buddhism.

Researchers: IBUKI Atsushi, WATANABE Shogo, MIZUTANI Kana

Unit 2: the researchers study Buddhist influence on Japanese mentality in Japanese literature and traditional performing art, the relationship between Chinese thought and Japanese Buddhism, and the Buddhist background of Japanese philosophy after Meiji era.

Researchers: TANICHI Yoshikazu, KIKUCHI Noritaka, SAGARA Tsutomu,  
OSHIKA Katsuyuki:

Unit 3: the researchers consider the overseas missionary of Buddhism, the influence of Japanese Buddhism on East Asia, and Buddhist education in India, Japan, and other countries.

Researchers: TAKAHASHI Norihito, SATO Atsushi, Koppula Victor Babu

The researchers examine comparing the research results of these three units, and consider the research results in the comprehensive way.

# 「一带一路」経済政策による中国経済の海外展開と

## その関係諸地域に及ぼす文化的影響

The Progress of China's Overseas Economic Expansion by "Belt and Road Initiative" (B&R) and its Cultural Influence to B&R Related Regions

研究代表者 後藤武秀（研究員、法学部法律学科・教授）

研究分担者 [研究員]

郝仁平（経済学部国際経済学科・教授）

王雪萍（社会学部メディアコミュニケーション学科・准教授）

千葉正史（文学部史学科・教授）

井上貴也（法学部企業法学科・教授）

子島進（国際学部国際地域学科・教授）

松本誠一（社会学部社会文化システム学科・教授）

三沢伸生（社会学部社会文化システム学科・教授）

[客員研究員]

朱大明（北京大学国際法学院・副教授）

福田義昭（大阪大学大学院言語文化研究科・講師）

高橋圭（日本学術振興院・特別研究員）

研究期間／平成 30 年 4 月 10 日～平成 31 年 2 月 15 日（2 年計画のうち 2 年次目）

キーワード／①一带一路 Belt and Road Initiative

②中国経済 China economy

③粵港澳大湾区 Great Bay Area

④文化的影響 Cultural influence

⑤交通基盤 Change infrastructure

平成 30 年度交付額／4,000,000 円

研究発表／学会および口頭発表

[論文]

・後藤武秀・郝仁平「中国南部における一带一路の一拠点『粵港澳大湾区経済圏』の展開」国際検討会論文集、遼寧大学日本研究所、2019 年 9 月

・後藤武秀・郝仁平「中国国内一带一路建設の新動向」日本研究第 166 期、遼寧大学日本研究所

・Nobuo MISAWA, "Koji Okubo and Tatar Exiles in Interwar Japan", in ABDURRESIT IBRAHIM VE ZAMANI (Ali Merthan DUNDAR ed.), Ankara ; Turk Tarih Kurumu, 2018, ISBN :978-975-16-3558-7, pp.55-74.

・福田義昭「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象（4）——軽井沢篇」『アジア文化研究所研究年報』（東洋大学アジア文化研究所）第 53 号、2018

・福田義昭「現代エジプト小説における祖国（ワタン）像《断章》」『ワタン論集（仮題）』中東現代文学研究会編、2018

・Yoshiaki FUKUDA, "Limādhā Yutarjimūna al-Adab al-'Arabī ilā al-Lugha

al-Yābāniyya?: Naẓra ‘alā al-Nuṣūṣ al-Muḥādhiya li-l-A‘māl al-Mutarjama (Why translate Arabic Literature into the Japanese Language?: A Look at the Paratexts of the Translated Works),” Al-Mu’tamar al-Dawli al-Khāmis: al-Tarjama wa-Ishkālāt al-Muthāqafa (5): Muntadā al-‘Alāqāt al-‘Arabiyya wa-al-Dawliyya, (5th International conference for Translation and the Problematics of Acculturation, held by The Forum for Arab and International Relations) at the Ritz-Carlton Hotel, Doha, Qatar. (December 11-12, 2018, アラビア語)

・井上貴也「珠江デルタ地帯の会社法制-香港・中国・日本の会社法制の比較-」国際検討会論文集、遼寧大学日本研究所、2019年9月

・朱大明「股東決議的瑕疵分類：範囲拡張及其限局性」月旦民商法雑誌 59号、2018年4月

[国内の学会における口頭報告]

・後藤武秀「中国の一带一路構想の延長線上にある国際社会—中華思想の現代的展開—」、地域文化学会第21回研究大会、2018年6月9日、東京海洋大学

・郝仁平「中国経済の課題と展望—『中所得の罫』を乗り越えられるか—」、地域文化学会第228回月例研究会、2018年11月7日、東京海洋大学

・三沢伸生「近代日本のイスラーム世界進出：諸史資料のGIS活用に向けて」『フィールドネット・ワークショップ 地理情報から読み解く歴史：イスラーム史におけるGISの活用』（於：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）、2019年3月21日、開催団体：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（主催）

[海外のシンポジウムにおける口頭報告]

・後藤武秀・郝仁平「中国南部における一带一路の一拠点『粵港澳大湾区経済圏』の展開」、中国遼寧大学日本研究所主催『一带一路框架下的中日交流与合作』国際学術研究会兼中日和平友好条約締結四十周年記念会、2018年9月8日、中国遼寧大学

・井上貴也「珠江デルタ地帯の会社法制」、中国遼寧大学日本研究所主催『一带一路框架下的中日交流与合作』国際学術研究会兼中日和平友好条約締結四十周年記念会、2018年9月8日、中国遼寧大学

・Nobuo MISAWA, “Sultan II. Abdulhamid ve Japonlar”, Vefatinin 100.Yilinda Sultan II.Abdulhamid ve Donem, Uluslararası Kongresi, 2018年10月23日（トルコ：イスタンブール）開催団体 Sulan II Abdulhamid Uygulama ve Arastirma Merkezi, Yildiz Teknik Universitesi（主催）、於：Cumhurbaşkanlık Osmanli Arsivi,（トルコ語）

[アジア文化研究所主催によるシンポジウム等の口頭報告(招聘研究者の報告を含む)]

・後藤武秀「珠江三角地帯から粵港澳大湾区への発展」2018年12月1日、東洋大学

・朱大明「粵港澳大湾区と会社法の発展」2018年12月1日、東洋大学

・馬文淵(清華大学創業教育センター)「粵港澳大湾区における産業学の発展と大学の機能」2018年12月1日、東洋大学

・易在成(マカオ科技大学)「粵港澳大湾区におけるマカオの位置づけとその役割」2018年12月1日、東洋大学

・崔岩(遼寧大学日本研究所教授)「中国東北地区振興与一带一路構想」2019年1月26日、東洋大学



## 研究経過および成果の概要

### 1. 研究方法

研究組織を代表者以外の分担者 10 名（研究員 7、客員研究員 3）、研究支援者 1 名、RA 3 名で構成した。研究に用いた主要言語は、日本語以外に中国語・英語である。

「一帯一路」経済構想は中国から六大回廊（①新ユーラシアブリッジ、②中国・モンゴル・ロシア、③中国・中央アジア・西アジア、④中国・インドシナ半島、⑤中国・パキスタン、⑥バングラデシュ・中国・インド・ミャンマー）に向けて展開されているが、2018 年度も前年度と同様に「西進」班（三沢・福田・高橋）と「南進」班（後藤・子島）を立てて推進することとした。

本共同研究の核心をなす「中国経済の研究」班（郝・王・朱）では経済政策のみならず中国語教育の世界展開、法整備の対応状況などを多面的に扱うことを目指し、そして「交通網の研究」班（千葉・井上）では具体的な交通基盤の整備、交通量の変化等を追うことを視野に入れている。

中国は地理的・文化的に多様性に富み、「一帯一路」経済構想は中国全地方で創唱されており、その全体像を画一的に把握することが難しいので、中国内のどこかに視座を定めて研究内容を深化させることが肝要であろう。そのため、2017 年度に中国遼寧省の国家重点大学・遼寧大学の日本研究所とアジア文化研究所との交流協定を締結し、本年度はその成果として相互にシンポジウムを開催した。

さらに、今年度は、「一帯一路」経済構想の影響（中国経済の海外展開）の及ぶ先について、われわれはトルコに国際共同研究の交流拠点を求め、2018 年 12 月にアンカラ大学と交流協定を締結した。

### 2. 研究経過および成果の概要

本年度は、一帯一路構想の展開過程において、中国で最も大きな投資が行われ、経済的にも文化的にも大きな変貌を遂げつつある南中国を共通の研究対象領域とした。特に、香港、マカオ、広州・深セン・珠海を海上橋で連結する港珠澳大橋が 2018 年 10 月に開通したことに伴い、この地域がどのように変貌しているかを多面的に調査研究した。中国では、この地域の名称が従来の珠江デルタ地帯という表現から粵港澳大湾区へと変わっており、これに伴って、マカオに隣接する珠海市横琴地区に巨大な投資が行われ、産業のイノベーション基地として機能しだしている状況を、現地の研究者とともに解明に努めた。その成果は、2018 年 12 月 1 日に東洋大学で開催したシンポジウムに、この地区から研究者を招聘して共同討議したことに現れている。また、昨年度に交流協定を締結した遼寧大学におけるシンポジウムに参加し、中国南部の開発の状況として報告することができた。

ほか、本共同研究の一つの課題は、若手研究者の指導と育成に注力することである。本年度は、研究支援者としてすでに博士号を有する梁凌詩ナンシー女史を採用し、RA として本学大学院博士後期課程に在籍する荻翔一(社会学研究科)、保科俊(社会学研究科)、程楽(文学研究科)を採用した。これらの若手研究者には、1 年間を通じほぼ安定して、週に 2 日程度の参加を求め、それぞれ本研究に関連する課題を提供し、基礎資料の収集と分析に携わる機会を提供した。

その最大の成果が、梁凌詩ナンシー編『一帯一路構想の進展——中国人労働者の厳雄と貿易の推移——The Progress of ‘Belt and Road Initiative: The Movement of Chinese Workers and the Trend of Trade』東洋大学アジア文化研究所 Research Paper Series: 11、2018 年 12 月の刊行である。著書として刊行することができ、同女史の将来の発展に資することができたことは、我々共同研究者としての大きな喜びである。

### 3. 今後の研究における課題または問題点

日本における一帯一路関連の研究に最初に着手したのが本共同研究である。このことは日本の斯学において今後とも特筆されるであろう。また、ともすると政治的観点から論じられがちな本課題について、具体的データを基にした研究成果を冊子として出版することができたのも本研究の特筆すべき成果である。しかし、本課題に関する研究はいまだその緒に就いたばかりであり、多くの問題が論じられていくことになるだろう。そこで、アジア文化研究所としては、本課題研究のために集積した資料をオンラインで公開することができるよう努めていく。

### Summary

The Progress of China's Overseas Economic Expansion by "Belt and Road Initiative" (B&R) and its Cultural Influence to B&R Related Regions since 2013 under the political regime of Chinese president Xi Jinping, "Belt and Road" initiative is seen as the fundamental arrangement of China's economic development plan. This initiative is believed that it will posit China's economic ranking in the globalizing economic world, therefore, China keeps figuring a new China-centered world economic regime. In order to export China's capital and technology to foreign countries, China establishes Asian Infrastructure Investment Bank (AIIB) and concludes certain development agreements with participating countries. Besides, China also conducts to promote Chinese language education globally to increase occasions of using Chinese as a common language by promoting Chinese technical experts and workers to work globally. International Chinese work migrants can also help to heighten linkage between the overseas Chinese worldwide and further increase the opportunity of Chinese as a common language in business. Therefore, "Belt and Road" initiative has strong influence on both economic and cultural area.

Our collaborative research aims to clarify how the key person of China's politic express or delivery message related to the "Belt and Road", what is the research trend of "Belt and Road" among the world, what kind of China related acculturation has occurred in "Belt and Road" participating countries, etc.

In 2017 and 2018, our research team has made up a timeline about "Belt and Road" by organizing the actions of "Belt and Road" key persons and its official news releases. Our research team also engage researches on how "Belt and Road" initiative is being researched among the world and the situation of Chinese language education in middle East region. We found that although "Belt and Road" has been introduced for 4 years, researches on "Belt and Road" are flourished in Chinese academia, but not in Japan or English academia. It may be because most of the construction projects related to "Belt and Road" are still under discussion or construction and the main development fund provider, AIIB starts its operation in late 2015. Besides, according to our case study in middle East about Chinese language education, although Chinese government urges to promote Chinese language education together with the "Belt and Road" initiative, there is no evidence showing the demand of Chinese language education increase sharply in middle East in 2017.